

# 邪馬台国論

## 4章 日本弥生時代の王

### 弥生文明の担った王たち

## 弥生の王、姫氏・熊氏

紀元前473年、中国春秋時代の古代王朝「呉」が滅亡した。

呉(ご、拼音:wú、紀元前585年頃 - 紀元前473年)は中国の春秋時代に存在した君国の一つ。現在の蘇州周辺を支配した。君主の姓は姫。元の国号は句呉。

六代王の闔閭の時代、呉は強勢となり、名臣孫武、伍子胥を擁し当時の超大国楚の首都を奪い、滅亡寸前まで追いつめた。しかし新興の越王勾踐に攻め込まれ闔閭は重傷を負い、子の夫差に復讐を誓わせ没する。夫差は伍子胥の補佐を受け、会稽にて勾踐を滅亡寸前まで追い詰める。勾踐が謝罪してきたため勾踐を許したが、勾踐は呉に従うふりをして国力を蓄えていた。夫差はそれに気付かず北へ勢力圏を広げ、また越の策にはまり伍子胥を誅殺し、中原に諸侯を集め会盟したが、その時にすでに呉の首都は越の手に落ちていた。紀元前473年、呉は越により滅亡する。この時、夫差は勾踐に対し助命を願った。勾踐は夫差に一度助けられていることを思い出し願いを受け入れようとしたが、宰相の范蠡に「あの時、天により呉に越が授けられたのに夫差は受け取らなかった。ゆえに今呉は滅亡しようとしているのです。今、天により越に呉が授けられようとしているのです。何をつまらない情を起こしているのですか」と言われ、和議を蹴った。それでも勾踐は夫差を小島に流刑にして命だけは助けようとしたが、夫差はこれを断って自害し、呉は滅びた。

夫差は越に闔閭を殺された後、薪の上に寝て復讐心を忘れなかった。勾踐は夫差に負けた後、胆を嘗めて復讐の心を呼び起こし、部屋に入るたびに部下に「汝、会稽の恥を忘れたか」と言わせて記憶を薄れさせないようにした。この故事から臥薪嘗胆の言葉が生まれた。また、呉越の激しいライバル争いから呉越同舟の言葉が生まれた。

ちなみに中国では日本人を「呉の太伯の子孫」とする説があり、それが日本にも伝えられて林羅山などの儒学者に支持された。徳川光圀がこれを嘆いて歴史書編纂を志したのが『大日本史』執筆の動機だったといわれている。  
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)

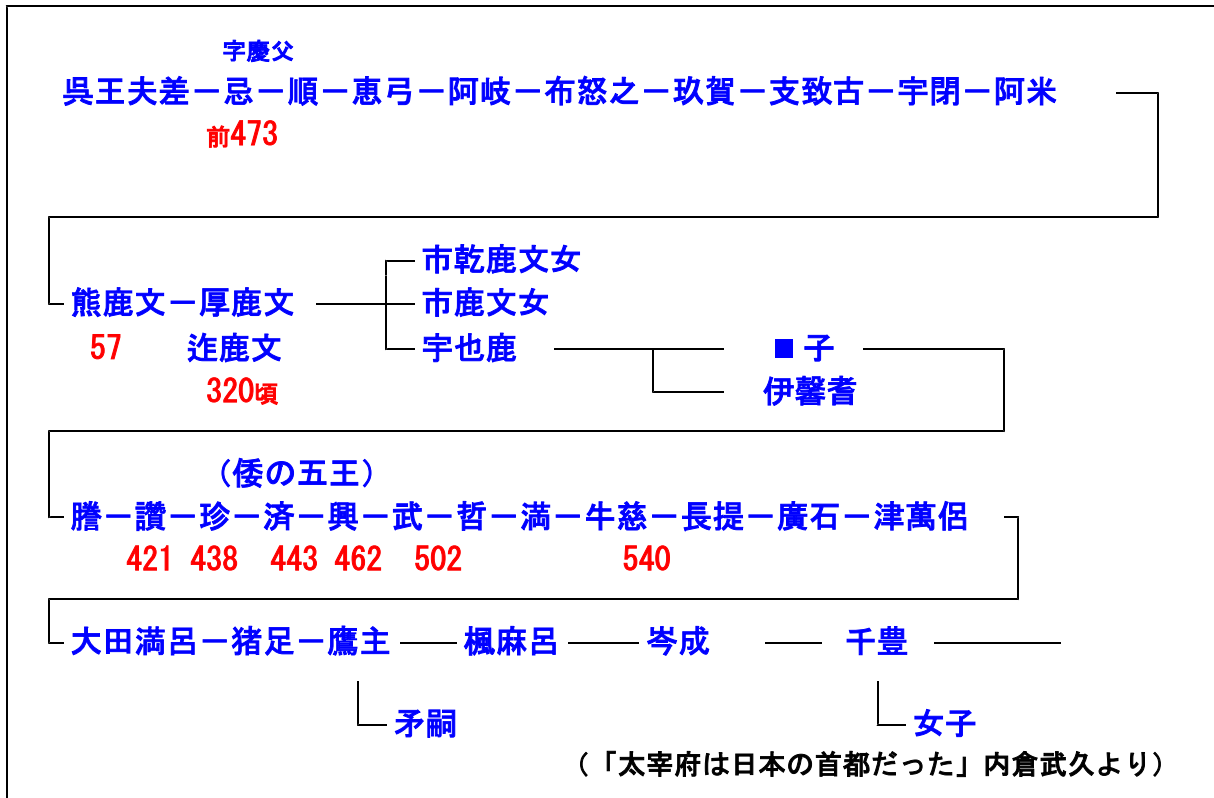
私たちがよく知る「臥薪嘗胆」の説話を生んだ二人の王の國が「呉」と「越」である。この「呉」は三国時代の「呉」ではない。紀元前春秋時代の「呉」である。

「越」によって國を滅ぼされた「呉」の人々は王一族の「忌」に率いられて九州に渡来してきた。従って彼らが来日したのは紀元前五世紀となる。彼らは先ず有明海に入り、熊本県菊池郡あたりに上陸してその地に弥生国家(弥生集落)を建設した。

「君主の姓は姫」と書かれているように初代王の名前は「忌」ではなく、「姫」だったのであろう。彼らは「姫(忌)」と名乗り、国名は「姫(忌)國」と名乗った。「姫(忌)國」が、後の、『魏志倭人伝』では、「倭國」と表記された。「姫」と「倭」は音が共通したからである。『魏志倭人伝』をはじめ、古代中国の史書には、「倭人」「倭國」と記されたのは、正確には、「姫人」「姫國」と言えるであろう。彼らは弥生文明を身につけていた。彼らが日本の弥生時代の主役である。

# 松野連姫氏系図

松野連姫氏系図はこの王朝の歴代を次のように記録している。しかし、この系図が全ての王を記録しているわけではない。多くの王の系譜が抜けている。今、よく知られている記録に基づいて年代を記入してみよう。



- ① 第十代「熊鹿文」はAD五十年代の王である。そして、次に記された「厚鹿文」は日本書紀景行天皇に登場する。従って彼の時代は四世紀初頭である。この間、約300年の王の系図は欠落している。
- ② その後、系図は「倭の五王」へとつながる。しかし、この間もほぼ100年ある。この間の系図も抜けている。
- ③ 「忌」から「熊鹿文」までは約420年間である。この間の王は九人である。これでは少ない。この期間を記録の確かな倭の五王の期間と比較してみよう。

倭王 讚	421年	倭王讚南朝劉宋に入貢する。
倭王 珍	425年	倭王珍が入貢し、安東将軍・倭國王に叙せられる。
倭王 濟	443年	倭王濟が入貢、安東将軍・倭國王に叙せられる。
倭王 興	462年	倭王興に詔して、安東将軍・倭國王とする。
倭王 武	478年	遣使上表し、使持節都督六國諸軍事・安東大將軍・倭國王に叙せられる。
倭王 武	479年	使持節都督六國諸軍事・安東大將軍に叙し、鎮東大將軍と号する。
倭王 武	502年	武を進めて征東將軍と号させる。

倭王「讚」から「武」まで5代の期間は80年～90年である。一代は約16年～18年となる。この想定によると、「忌」から「阿米」までは8代で、その期間は128年～144年となる。「阿米」は紀元前345年～329年頃の王となる。従って、「阿米」と「熊鹿文」の間にも多くの王の系図が欠落していると思われる。

だが、松野連姫氏系図には、初代「忌」から第十代「熊鹿文」まで、誠に興味深い名前がずらりと並んでいる。これらの王の一部については古代中国王朝の史書に記録が残る。だが、彼らは日本の弥生時代を生きた王である。古代中国の史書には記録があるが、日本の史書には記録がない、ということではない。我が国の至宝、『古事記』『日本書紀』にもこれらの王は姿を現わしている。だが、その姿は王ではない。神である。『古事記・日本書紀』の神代の主役は彼らである。

## 初代・忌

初代王は「忌」である。記紀は神武の國を「倭國」と表記している。「倭國」という国名は「忌」に由来する。我が國の弥生文明を築いた姫氏一族は初代の王「忌」の名前をとってその國を「忌の國」と呼んだ。「忌」は同じ読み「倭」に変換されて、「倭國」と表記された。それが『魏志倭人伝』における「倭國」「倭人」であろう。だが、系図の初代の王の名前は「忌」ではなく、「姫」である。であれば、彼らは、本来、「忌國」ではなく、「姫國」「姫人」と表記していたと思われる。その「姫國(キコク)」が同じ音を持つ「忌(キ)」或いは「倭(キ)」に変換され、「忌國(キコク)」、「倭國(キコク)」と表記されたと考えるべきであろう。「倭國」は「ワコク」ではなく、「キコク」と訓まれるべきである。

## 二代・順

系図は第2代王「順」の時に、「委奴」に移住して新しく國を拓いたと伝えている。この「委奴(イト)」は糸島半島の「怡土」ではない。2代目の王、「順」が移住して作った「委奴」の國とは佐賀県吉野ヶ里である。吉野ヶ里には甕棺に収められた十四基の王の墓が特別に存在する。第2代の王、「順」以降の王一族が甕棺に収められ埋葬されているのであろう。

三世紀の『魏志倭人伝』に「伊都國」と書かれた國は「順」が建国した「委奴國」である。が、その場所は吉野ヶ里から少し南の佐賀市に移っている。『魏志倭人伝』には「伊都國」には「世有王」と記されている。「順」から「熊」までの「委奴國」の男王の系譜が『魏志倭人伝』『伊都國』でも続いていたのである。



吉野ヶ里遺跡  
北墳丘墓展示

## 四代・阿岐

第4代は「阿岐」である。訓は「アギ」であろう。「阿岐」は「安藝」と同じである。「安藝」も「アギ」と訓まれている。「阿岐」に関しては『記紀』に確かな存在記録がある。それは「阿岐國」として古事記の神武天皇に登場する。神武は王朝の統治にふさわしい首都を求めて、まず、「筑紫國」を訪問した。その國の「岡田宮」に1年滞在し、次に向かったのが、「阿岐國」であった。この國の「多禰理宮」に7年滞在した。神武がこの國の宮に滞在したのは、この國が祖先以来の支配國だったからである。

この「阿岐國」を支配下に置いたのは伊邪那岐命である。「阿岐國」は「大倭豊秋津嶋」と呼ばれていた島(半島)に存在した。伊邪那岐命はこの島(半島)に存在していた「阿岐國」を天(あま)王朝の下に統合支配した。それが「大八洲國生み」といわれる史実である。

伊邪那岐命が「阿岐國」を建国したのではない。伊邪那岐命の時代以前に「阿岐國」は存在していた。伊

邪那岐命はすでに建国されていたこれらの弥生国家を天王朝の下に統一し、強力な中央集権国家を造ったのである。

では、伊邪那岐命以前、遙か古代に、「阿岐國」を建国したのは誰であろうか。「阿岐」である。現在、私たちは「阿岐」を国名として理解している。それはそれでいいが、その国名は「阿岐という王の國」という意味をもつ国名と理解すべきである。「阿岐國」を造ったのは、姫氏系図・第4代の王「阿岐」であった。故に、「阿岐」という王名を以て、国名としたのである。

神武が7年滞在した「阿岐國」とは、姫氏系図第4代の王「阿岐」が建国し、伊邪那岐命が統合し、その後、天(あま)一族の子孫である神武の支配下にあった國である。

この「阿岐國」とはどこか。広島、安芸ではない。門司大積である。ここは古代の良港であった。神武より遙か昔、姫氏の王、「阿岐」の一族は「委奴國(吉野ヶ里)」から門司大積まで遠征し、そこに弥生集落を造り住み着いた。「阿岐國」とは「王、阿岐の國」という支配権を主張する国号である。最も簡明な国号といえる。以後、私たちは『記紀』の中に、姫氏系図の王の名前を国名とする古代国家に出会うことになる。

## 五代・布怒之 六代・玖賀 七代・支致古

第6代の王は「玖賀」である。訓は「クガ」であろう。この名前は「古賀」に変化したのではなかろうか。古賀市は福岡県糟屋地方に位置する。旧・糟屋郡古賀町である。ここは6代の王「玖賀」が建国した弥生国家だったのではないだろうか。「古賀」の地名は九州各地に存在する。この王の一族が住んでいたからである。また第7代王は「支致古」である。訓は「シチコ」であろう。「シチコ」は「ヒコ」に変化したのではなかろうか。「石土毘古(伊邪那岐命の子)」「甕主日子(大國主の子)」「少名毘古(神産巢日神の子)」「神倭伊波禮毘古(神武)」など「彦」は『記紀』で多く見られる王の名前である。「彦」は「支致古」からの変化であろう。第5代王は「布怒之」である。訓は「フヌシ」であろう。「フヌシ」は「フ・ヌシ」である。「布」が名で「怒之」は字であろう。「ヌシ」は「主」である。「主」も王の名前によく使われている。出雲王朝、「大國主命」はこの名を継承している。

## 八代・宇閉

松野連姫氏系図には、第8代に「宇閉」という名前の王がいる。この王の名は「宇」で「閉」は字であろう。古事記に登場する「天」の始原の神に、「宇摩志阿斯訶備比古遲神」「宇比地邇上神」がいる。訓みは難解であるが、この二人の神の名も、「宇」である。姫氏系図の第8代の王「宇・閉」に由来する名前であろう。「宇」という名の人名、地名は記紀に度々登場する。紀元前1世紀の半ば、九州天皇家の始祖、神武は「日向(小倉北区)」の「高千穂宮」を出て、「筑紫國」を訪問した。この「筑紫國」とは門司港である。ここに「豊國」があった。「豊國」とは「豊という名前の王の國」という王名に由来する国号である。

故、豊國の宇沙に到りまし時、其の土人、名は宇沙都比古、宇沙都比賣の二人、一膳官を作りて大御饗献りき。  
(古事記・神武天皇)

その「豊國」に、「宇沙」の地があった。「宇沙」の地名の「宇」もやはり王の名前であろう。この土地の所有者が「宇」であることを表示している。王の名前が、「宇沙都比古」である。この名前も「宇」の「沙都(津)」の「比古(王)」という意味を持つ。彼も、また、姫氏系図第8代の王、「宇・閉」の一族であろう。神武は、その後、「阿岐國」から妻の実家、古代吉備(彦島)に渡り、造船し、兵を募り、北九州小倉南区に侵攻した。これがいわゆる「東征」である。神武がそこで戦った相手は、「宇迦斯」と云った。この人物の名前も「宇」という一字名で、「迦斯」は「あざな」であろう。古事記は神武が戦った土地の名を「宇陀」と書いている。この地名も「宇の田(宇の所有する田)」の意味であろう。小倉南区を差配していた長官、「宇」兄弟も姫氏系図の王「宇」の一族だったと思われる。或いは小倉南区に「宇」が建国した「宇國」が存在したとも考えられる。

神武が遠征した北九州各地は姫氏系図のそれぞれの王の末裔が支配していた土地であった。それ故、姫氏系図に登場する王の名前に由来する人名、地名が現れるのである。記紀はそれらを正確に記録に残している。神武が戦った土地(國)は、現在の地名で云えば、小倉南区、荻田町、行橋市、香春町である。神武の時代、これらの地域の支配者は姫氏に代わって、姫氏より約200年遅れて日本列島に渡来してき

た「楚」の王家一族の「熊氏」であった。記紀では「熊襲」と表記された一族である。当時、香春町にも「倭国」があり、そこには二人の王がいた。「磯城の八十梟師」と「赤銅の八十梟師」である。彼らの名は「タケル」である。「タケル」は、「楚」の熊氏一族の伝統的な王の名前である。香春町はこの熊襲一族が支配していた國であった。神武はこの熊襲との戦いに勝利した。香春町には象徴的な山がある。三連山の香春岳である。神武はこの山を「畝傍山」と呼んだ。そして「畝傍山の東南」に帝宅を構え、建国を宣言した。香春岳の東南の丘とは、現在の地名では高野である。この高野に神武が建てた帝宅が貴船神社として存続している。

記紀は神武の國を「倭國」と書いている。だが、神武は自國を「キコク」、または、「ワコク」と呼ばず、「ヤマトの國」と呼んでいる。何故、「ヤマト」と呼んだのであろうか。神武のルーツは「天(あま)」である。「天(あま)」は、彦島老町に存在した「高天原」を中心とする連合國家であった。天王朝の弥生國家の実態は「大八洲」と云われた八つの嶋の湊の作られていた弥生集落である。その集落は、「ミナト」と呼ばれていた。「水門」「湖」「湊」などは、湊に形成された弥生集落を表す。「ミナト」とは「水の戸」という意味であろう。つまり、海辺に存在する集落、港町の意である。一方、神武が建国したのは田川盆地である。海とは遠く隔たる山の中である。よって、「海辺の集落(ミナト)」と区別して、「山の戸(ヤマト)」と呼んだのではないか。これが「ヤマト」の本来の意味と思われる。「倭國」という国名は「王である忌(倭)が支配する國」という明確な主張を持つ国号である。だが、「ヤマト」にはそのような国権の主張はない。従って、「ヤマト」は国号と謂えるものではなく、内陸部の弥生集落の形態を表現したものにすぎないであろう。

## 九代・阿米

第9代の王が「阿米」である。訓は呉音で「アマイ」であろう。この王の名前が何とも興味深い。というのは「阿米(アマイ)」は「天(アマ)」を連想させるからである。なお、「阿米」は「アマイ」と訓むのであろうが、名は「阿」で「米」は字であろう。同じように、第4代の「阿岐」は、名は「阿」で、「岐」は字であろう。「阿岐」と「阿米」は「阿」という名が共通するから同族であろう。

## 「阿米」の時代

阿米はいつ頃の王か。初代王忌から阿米までは「忌—順—恵弓—阿岐—布怒之—玖賀—支致古—宇閉—阿米」の9代である。この9代を記録に残る「倭の五王」の在位期間と比較してみよう。

倭王讚421年—倭王珍425年—倭王濟443年—倭王興462年—倭王武478年—倭王武479年—倭王武502年

倭王「讚」から「武」まで5代の期間は80年～90年である。一代は約16年～18年となる。この計算に基づくと、「忌」から「阿米」までの9代は、128年～144年となる。「忌」の渡来が紀元前473年とすれば、「阿米」は紀元前345年～329年頃の王と思われる。

## 記紀神話の「天之御中主神」の時代

記紀の最古の神話は、「天」に始まる。記紀神話は、「天一族」の神話である。古事記は次のように書き始めている。

天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。

次に神産巢日神。此の三柱の神は、並独神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に國稚く浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用幣流之時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。

上の件の五柱の神は、別天つ神。

次に成れる神の名は、國之常立神。次に豊雲上野神。此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。次に成れる神の名は、宇比地邇上神、次に妹須比智邇去神。

次に角杵神、次に妹活杵神。次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神。次に於母陀流神、

次に妹阿夜上訶志古泥神。次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。

上の件の國之常立神以下、伊邪那美神以前を、併せて神世七代と称ふ。

「高天原」とは、彦島老町に存在した高地性弥生集落である。彦島周辺の弥生集落(原)は、普通、海辺に作られていた。故に、伊邪那岐命の建国は、「大八島(洲)」と表記されるのである。これらの弥生国家は港(洲)に存在した小さな弥生集落であった。ところが、「高天原」は彦島の老の山に存在した。ここは小高い丘である。故に、「高・天・原」(高いところに存在する天の集落)と呼ばれていたのである。

では、何故、彦島の弥生集落の名前が、「天(あま)」と呼ばれたのか。古事記が伝えるように、彦島に始原の神、「天之御中主神」が現れた。彼はそこに弥生集落を建設した。その集落が「天之御中主神」の名前をとって、「天(あま)の原(ばる)」と呼ばれたのである。「天」とは神の名前である。「高天原」という地名は、この始原の神の名前、「天(あま)」に由来する。むろん、この神は天上界にいたのではない。地上の人間である。

彦島に始原の神「天之御中主神」が現れて弥生集落を建設し、やがて姿を消した。続いて、5人の神が現れ、また、姿を消した。この5人の神を、「五柱の神は、別天つ神」と古事記はいう。

- |               |          |         |
|---------------|----------|---------|
| 1 天之御中主神      | 2 高御産巢日神 | 3 神産巢日神 |
| 4 宇摩志阿斯訶備比古遲神 | 5 天之常立神  |         |

次に現れた神が、「國常立尊」である。この神より伊邪那岐命・伊邪那美命までを、「神世七代」という。伊邪那岐命はよく知られている神である。伊邪那岐が禊をしてのち、「天照大神」が生まれた。誕生の地は彦島小戸に面した弥生集落である。この集落は、「阿波」と呼ばれていた。彦島小戸を流れる潮がぶつかって泡となる。その様子からの国名である。阿波國の王は女王であった。この女王と伊邪那岐命との間にできた子どもが、「天照大神」であろう。天照大神は彦島小戸で生まれ、彦島・老の山公園に存在した弥生集落(高天原)で育った。伊邪那岐命・伊邪那美命から天照大神、その弟、素戔鳴尊までその物語の舞台は「天」、すなわち彦島であった。

- |          |           |          |       |
|----------|-----------|----------|-------|
| 1 國之常立神  | 2 豊雲上野神   | 3 宇比地邇上神 | 4 角杵神 |
|          |           | 妹須比智邇去神  | 妹活杵神  |
| 5 意富斗能地神 | 6 於母陀流神   | 7 伊邪那岐神  |       |
| 妹大斗乃辨神   | 妹阿夜上訶志古泥神 | 妹伊邪那美神   |       |

## 「天之御中主神」の時代

では、古事記神話の始原の神、「天之御中主神」が彦島に現れ、「高天原」を作ったのはいつの頃か。記紀から推定するのは容易ではない。その時代、そのルーツは記紀の記憶の及ばない遥か古代に遡る。しかし、伊勢國風土記が、「天之御中主神」に関する記録を残していた。この記録を参考にしよう。

伊勢の國の風土記に云わく、夫れ伊勢の國は、天御中主尊の十二世の孫、天日別命の平治けし所なり。天日別命は、神倭磐余彦の天皇、彼の西の宮より此の東の州を征ちたまひし時、天皇に随ひて紀伊の國の熊襲の村に到りき。時に、金の鳥の導きの隨に中州に入りて、菟田の下縣に到りき。天皇、大部の日臣命に勅りたまひしく、「逆ふる輩、イコマの長牒を早く征ち罰めよ」とのりたまひ、亦、天日別命に勅りたまひしく、「天津の方に國あり。其の國を平けよ」とのりたまひて、即ち標の劍を賜ひき。天日別、勅を奉りて東に入ること幾百里なりき。其の邑に神あり。名を伊勢津彦と曰へり。

伊勢國風土記に残る神武東征の記録である。この伊勢國は三重県伊勢ではない。神武は三重県伊勢市には足を踏み入れていない。この伊勢は行橋市に存在した古代伊勢である。古代伊勢(行橋市)は神武がめざした倭國(香春町)への途上に存在した國であった。故に、神武は「天日別命」にあらかじめ征討を命じたのである。さて、神武の武将であった「天日別命」は「天御中主尊の十二世の孫」と書かれている。風土記によれば、神武の時代から十二代遡った頃に「天御中主尊」が生きていたということになる。一代を何年とするか。通常は約30年とするが、はるか古代であることを考えれば、やや短く、25年と仮定しよう。神武の時代から約300年遡った時代に「天御中主尊」が現れた事になる。

## 神武在位は紀元前一世紀後半

では、神武はいつ頃の人か。第十代の天皇、崇神の崩年について、澁谷雅男氏の研究がある。澁谷雅男氏は、「崇神の崩年は西暦258である」という。(「日本書紀を批判する」古田武彦/澁谷雅男) 氏の研究に基づいて日本書紀の在位年数を遡れば、神武の在位を推定することができる。なお、日本書紀・古事記に記された年齢、在位は二倍歴とする。神武は、紀元前一世紀後半の人である。

天 皇	年齢(実年齢)	在位年(実在位)	在位期間	崩 年
1 神武	127(63)歳	76(38)年	BC52~BC14	BC14年
2 綏靖	84(42)歳	33(16)年	BC14~AD2	2年
3 安寧	57(28)歳	38(19)年	2~21	21年
4 懿徳	77(38)歳	34(17)年	21~38	38年
5 孝昭	114(57)歳	83(41)年	38~79	79年
6 孝安	137(68)歳	102(51)年	79~130	130年
7 孝靈	128(64)歳	76(38)年	130~168	168年
8 孝元	116(58)歳	57(28)年	168~196	196年
9 開化	115(57)歳	60(30)年	196~224	224年
10 崇神	120(60)歳	68(34)年	224~258	*西暦258年

\*「日本書紀を批判する」 古田武彦/澁谷雅男 共著

神武在位を、BC52~14年とする。これより、300年遡った時代に「天之御中主神」が現れた。「天之御中主神」が現れたのは、BC352~314年頃である。

## 姫氏系図の「阿米」と記紀神話の「天之御中主神」

姫氏の祖「忌」が渡来したのは、遙か昔、紀元前473年頃のことである。姫氏系図九代の王「阿米」は姫氏系図から考察して、紀元前345年頃の王と思われる。一方、伊勢國風土記に記された「天之御中主神」はBC352~314頃の神と推定できる。

「阿米」と「天之御中主神」はほぼ同時代である。二人の生きた時代は一致する。では、姫氏系図の王、「阿米」と記紀神話の神、「天之御中主神」は同一人物なのか。

古事記の始原の神は天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神の三人である。続く神は宇摩志阿斯訶

備比古遲神・天之常立神の二人である。そして國之常立神と豊雲上野神の二人の神が続く。これら七人の神にはある特徴が描かれている。

- ・並独神と成り坐して……………妻がいた。が、何かの原因で妻が亡くなった。
- ・身を隠したまひき ……………現れてそして隠れた。彼らは次々と現れては姿を消した。彼らは定住しなかった。

この七人の神に共通する特徴から浮かぶ人物像はなにか。現代社会においてすぐ思いつくのは、旅人である。旅人はやって来て、そして去っていく。だが、この時代に、彼らが単純に旅行していたとは想像しにくい。旅行者ではないであろう。では、商人はどうであろうか。商人もまたやって来て、売り買いし、また去っていく。だが、商人が神と畏敬され、畏怖されることはないであろう。

彼らは、一体、何者なのであろうか。……軍人であった、と思われる。彼らは軍人であった。彼らは遠くからやって来たいわば遠征軍だった。「独神」とは、遠征に妻は同行していたが、その妻が死んで、独りになったという意味であろう。また、「身を隠したまひき」とは、「隠遁した」とか、「消えた」という不明瞭な出来事ではなく、再び遠征に旅立っていったという意味であろう。

記紀神話の始原の神「天之御中主神」は遠征してきた軍人であった。「天之御中主神」の名前に於ける「中主神」とは、「中心の主たる神」という表記である。つまり、司令官である。名前自身は「天」である。「天之御中主神」とは、「天(アマ)」という名の司令官といった意味となる。では、「天(アマ)」とは何か。

## 「天之御中主神」と「阿米」は同一人物

「天(アマ)」とは「阿米(アマイ)」の訛であろう。「高天原(彦島)」に現れた司令官は、本来、「阿米(アマイ)」と名乗ったのである。「阿米(アマイ)」が訛って、「アマ」となり、古事記は、訛の「アマ(天)」という名前で記録した。

「天(アマ)」とは本来の名前で云えば「阿米(アマイ)」である。古事記神話の「天之御中主神」は姫氏系図第九代の王、「阿米」である。姫氏九代の王、「阿米(天之御中主神)」は最先端の文明と武器を持つ最強の弥生国家、「委奴國(吉野ヶ里)」の王であった。吉野ヶ里遺跡は要塞ともいえる構えをしている。「委奴國」は、まさに、軍事国家であった。



吉野ヶ里遺跡  
(委奴國)



時代は弥生国家と縄文国家との戦国時代である。「委奴國」の歴代の王は周辺世界を踏破征服していったと思われる。当然、北九州にも遠征した。彦島にも上陸した。彼は、「委奴國(吉野ヶ里)」から彦島へ遠征してきた。だが、「阿米」は一人で来たのではない。軍を率いていた。古事記はその軍勢については何も書いてはいない。「阿米」は、まるで一人で現れ、一人で姿を消したように書いているが、実は、彼は多くの将兵を率いていた、と読むべきであろう。

「阿米」は委奴國の國王であった。そして「阿米」は全ての将兵にとって絶対的な存在だった。故に「神」と畏敬されたのである。「神」と畏敬されたのは、絶対君主、「阿米」だった。他に多くの将兵がいたが、彼らは神と畏敬されたのではない。絶対存在は「阿米」一人だった。故に、古事記は「天之御中主神」と云う神が一人が現れたと書いたのである。だが、実際は彼は「委奴國」の多くの将兵とともに彦島に現れたのである。

私たちは、彦島「高天原」に現れた始原の神「天之御中主神」のイメージを一新しなければならない。この神は通常の意味の宗教的な神ではない。神とは守。神とは国主。神とは輝く銅剣を佩き、「かみ」と畏敬された最強の軍事国家「委奴國」の絶対君主、「阿米」だった。



記紀に現れた始原の神、「天之御中主神」とは、百戦錬磨の精鋭軍を引き連れ、絶対的な権力を持った偉大なる司令官「阿米」だった。

卑弥呼の都があったのは八女市である。そこには多くの古墳が存在する。古墳からその國の王が身につけていた鉄製の甲冑が出土している。それらは八女市の岩戸山歴史資料館に展示されている。彦島に現れた始原の神はこのような甲冑を身につけ戦いを挑んできた恐るべき神であった。



**岩戸山歴史資料館蔵**

## 九州天皇家の遙かなる祖、阿米

記紀神話「天之御中主神」と姫氏系図「阿米」が始原で結び付く。「天(アマ)」は、「阿米(アマイ)」の訛だと理解すれば、「天」とは地名ではなく、國王の名前だったのである。「天國(アマクニ)」とは、「阿米の國」という国主を表示した国号である。その後、「阿米」の一族が二人来た。「高御産巢日神」「神産巢日神」である。その後、また一族の二人がやって来た。その一人は「宇摩志阿斯訶備比古遲神」と云った。この名前は難解であるが、名は「宇」であろう。「阿米」の先代に「宇閉」がいる。「宇閉」も名は「宇」、字が「閉」であろう。「宇摩志阿斯訶備比古遲神」は王「宇閉」の一族と考えられる。もう一人は「天之常立神」と云った。彼も「阿米」の一族である。この五人は、「別天つ神」といわれるように、「天之御中主神(阿米)」の別派であったと思われる。

記紀神話に現れた始原の神は委奴國(吉野ヶ里)の國王「阿米」と先代の王「宇閉」の一族であった。「阿米」とその遠征軍は彦島に上陸し、彦島「老の山」に新しい弥生国家を建設した。それが「阿米の國」、記紀で「高天原」と呼ばれている弥生国家である。「高天原」とは「高地に存在する「阿米」が作った原(集落)」という意を持つ弥生集落(弥生国家)である。(「阿米」はその後、更に東進する。そして関西に上陸する。そして、奈良を本拠とする日本國天皇家の祖となった。これはもう一つの天皇家の物語である。)

彦島老の山は、当時、弥生集落を建設する地としてふさわしい場所だったと思われる。海に近く生活に至便、また、小高い丘で、北と東と西の海は一望できる。外敵の侵入に対して防御も容易にできる。彦島は関門海峡の要所にある。東の瀬戸内海へ侵攻していくためにはここを押さえなければならない。委奴國王「阿米」はこの島を重用視し、「阿米(天)國」を建設したのである。これが、「天國(高天原)」の起源である。「阿米(天)」の物語は伊邪那岐命へ、伊邪那岐命から天照大神、天照大神からニニギへ、ニニギから神武の九州天皇家へと引き継がれていくことになる。



<http://www7a.biglobe.ne.jp/~yuji-tabisaki/hikoshima2.0.html>

## 國之常立神

「天」という国名(地名)の由来となった始原の神「天之御中主神」の正体があきらかになったところで、再び記紀に戻ろう。「天つ神」の五人の次にやって来たのは「國之常立神」と「豊雲上野神」である。彼らは「天つ神(阿米一族)」ではなかったと思われる。別の系譜の神であった。だから古事記は二つに分けて書いているのである。

記紀神話には「天つ神」の系統と「國つ神」の系統の二つがあったことが書かれている。天照大神の孫、邇邇藝能命が小倉北区の「葦原中國」に降り、木花之佐久夜毘賣を娶り、彼女が妊娠を告げて出産する場面である。

故、後に木花之佐久夜毘賣、參出て白しく、「妾は妊身めるを、今産む時に臨りぬ。是の天つ神之御子は、私に産むべからず。故、請す。」とまをしき。爾に詔りたまひしく、「佐久夜毘賣、一宿にや妊める。是れ我が子にはあらじ。必ず國つ神の子ならむ」とのりたまひき。爾に答へ白しく、「吾が妊みし子、若し國つ神の子ならば、産むこと幸からじ。若し天つ神の御子ならば幸からむ。」とまをして、即ち戸無き八

尋殿を作りて、其の殿の内に入り、土を以て塗り塞ぎて、産む時に方りて、火を其の殿に著けて産みき。故、其の火の盛りに焼る時に生める子の名は、火照命。此者隼人阿多君之祖。次に生める子の御名は、火須勢理命。次に生める子の御名は火遠理命。亦名は天津日高日子穗穗手見命。

「天つ神」とは「天之御中主神」である。「國つ神」とは「國之常立神」である。「天」と「國」は今まで地名と考えてきたがそうではなく、どちらも王の名前であった、と考え直すべきである。「天之御中主神」は姫氏の王「阿米」である。それでは、「國之常立神」とは何か。この神も「阿米」と同じく姫氏一族の王であろう。姫氏系図には、「國」という名前前の王は存在しない。「阿米」と「熊」の間には395年ほどの歳月が流れている。この間の王の系図は欠落している。古事記では、「國之常立神」は「天之御中主神」より、5代遅れて登場する。姫氏系図では「阿米」の次に現れる王は「熊」である。「阿米」は姫氏一族であるが、「熊」は姫氏一族ではない。姫氏系図には存在しないが、「阿米」の次に、「國」という王が存在したのではなかろうか。神の名前は「國之常立神」である。「國」と「天」は対応している。「天」が「阿米」という王名であるならば、「國」もまた王の名前であろう。「國(クニ)」とは、現代の意味での「nation」ではなく、人名だった。

「天」が本来は「阿米」であったように、「國」も本来は別の表記だったと思われる。第五代王の名前は「玖賀(クガ)」である。この名前も、「玖(ク)」が名で、「賀」が字であろう。「國之常立神」の名前の「國」も本来は、「玖・仁」とか「玖・禰」だったのではなかろうか。彼は第五代国王「玖・賀」の一族であろう。

初め、「阿米」とその軍勢が現れた。そして、彦島に「阿米(天)國」を作って去って行った。その國が「高天原(彦島老の山)」である。次に、「天つ神(阿米一族)」ではない、「國之常立神」が現れた。この時、委奴國では王が「阿米」から、「國」に変わっていたと思われる。そして、新しく國王となった「國之常立神」も、また彦島に came。彼もまた「阿米」と同じように新しい弥生集落を作った。それが、後年、倭健(ヤマトタケル)が遠征した古代の「常陸國」である。「常陸國」はこの「國之常立神」が建国した小倉南区の古代國であった。「常立(トコタチ)」が「常陸(ヒタチ)」と訛ったのである。

次が「豊雲上野神」である。この神の名前は「豊」である。この神の子孫が「伊豫二名嶋」の女王「豊」であろう。女王は、「豊」、または、「伊豫」と呼ばれた。故に、彼女の國は「伊豫二名嶋」と呼ばれたのである。

ここまで七人の神がやって来たが、その妻が亡くなってしまった。そして、彼らは新たな遠征に向かった。ところが、「豊雲上野神」の次にやって来た夫婦の神「宇比地邇上神」と「妹須比智邇去神」は遠征に向かわなかった。彼ら夫婦はそのまま彦島に住み着いた。故に、古事記は「身を隠したまひき」と書かなかつたのである。彼らが定住した彦島の弥生集落は発展した。この夫婦の神の名前は「宇比地邇上神」である。名は「宇」である。「宇比地邇上神」は姫氏系図第八代の「宇閉」の一族であろう。

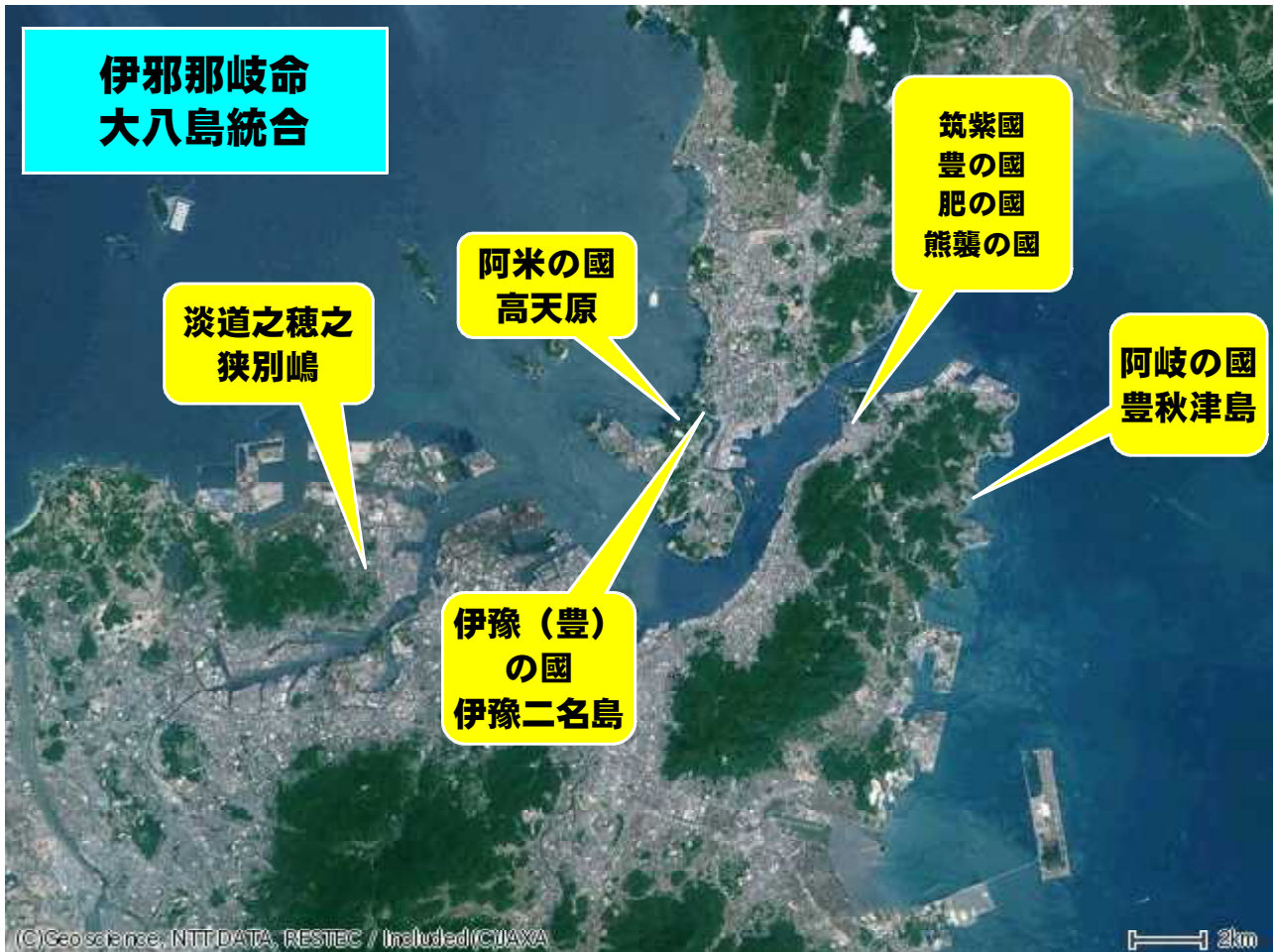
## 伊邪那岐神・妹伊邪那美神の國生み

やがて、伊邪那岐神・妹伊邪那美神の時代に到る。二人の時代はもはや超古代ではない。二人の足どりは明快である。彼らの任務は建国ではなく統合である。伊邪那岐神、妹伊邪那美神は新しい国家(弥生集落)を作ったのではない。すでに姫氏系図の王「阿岐」・「宇」・「阿米」・「國」・「豊」たちによって彦島周辺にはそれぞれ一族の弥生集落が作られていた。だが、それらの國(弥生集落)はバラバラに存在していた。姫氏の王たち一族が作った弥生集落ではあったが、統一されず、それぞれに存在していたのである。そこでこれらの彦島周辺の弥生集落(弥生国家)を統合、統一することが彼らに命じられた仕事であった。伊邪那岐・伊邪那美夫婦は、これらの「ただよえる(分散した)國」を統合統一したのである。これが「大八洲國生み」の物語である。

その後、伊邪那岐神は、人生の晩年に、「阿米」王朝にとって重要な三人の子どもを得る。「天照大神」と「月讀命」「建速須佐之男命」である。

此の時伊邪那岐命、大く歡喜びて詔りたまひしく、「吾は子を生まて、生まての終に三はしらの貴き子を得つ。」と詔りたまひき。即ち御頸珠の玉の緒母由良邇、取り由良迦志て、天照大御神に賜ひて詔りたまひしく、「汝命は、高天原を所知らせ」と事依さして賜ひき。故、其の御頸珠の名を、御倉板擧之神と謂ふ。次に月讀命に詔りたまひしく、「汝命は夜之食國を所知らせ。」と事依さしき。次に建速須佐之男命に詔たまひしく、「汝命は、海原を所知らせ」と事依さしき。(古事記上巻)

天照大神はその名の如く「阿米」が建設した「高天原」を受け継ぐことになる。弟の「月讀命」には「汝命は夜之食國を所知らせ」と命令した。この命令はその名前の如く、「月を読む」仕事である。「月を読む」という意味は太陰暦の作成である。暦作成とは政治、行政を意味する。「月讀命」の仕事とは謂わば「阿米」國の国務であった。天照大神が国主、月讀命が宰相という関係である。



## 九州天皇家の「出雲の國」は小倉南区

「建速須佐之男」には「海原を所知らせ」と命じた。この意味は関門海峡支配である。関門海峡には「阿米」王朝の各国が存在した。それらの弥生集落を支配せよと命じたのである。建速須佐之男はその後、母の国、小倉南区に渡り、其処に出雲王朝を築くことになる。小倉南区下吉田には「須佐之男」を祀った建速神社が曾根の海を望む高台に存在する。

伊邪那岐命の功績は多大であった。彼と彼の聡明な子ども「天照大神」によって「阿米」王朝は北九州に発展を遂げていく。





「熊鹿文」はその何代目かである。彼以降の「委奴國」王も熊氏の系譜である。

彼が王であった「委奴國」とは吉野ヶ里遺跡である。熊鹿文の時代から約200年間吉野ヶ里(委奴國)は繁栄していた。ところが発掘調査の結果では吉野ヶ里遺跡は3世紀後半には終焉を迎えたと云う。

#### 吉野ヶ里遺跡の終焉

3世紀後半頃、吉野ヶ里遺跡全体を取り囲む環壕は、ほぼ埋没し、北内郭、南内郭とともにその機能が失われてしまったと考えられています。それと前後して、南内郭付近の丘陵部には4基の前方後方墳が築かれます。吉野ヶ里丘陵の南部一帯は、人々の生活する集落から、人が葬られる埋葬の地へと変化したようです。

(<http://www.yoshinogari.jp/contents3/?categoryId=26>)

- (4) 吉野ヶ里を去った熊氏王家は吉野ヶ里の南の豊かな佐賀平野に移っていた。そこに新しい国家を建設した。その國が魏志倭人伝が記録した「伊都國」である。「世々王有り」と記録された「伊都國」である。
- (5) 姫氏系図では熊鹿文の次の王は厚鹿文である。熊鹿文と次の厚鹿文の「字(あざな)」はどちらも「鹿文」で共通する。厚は熊の鹿文を引き継いだと考えられる。厚もまた熊氏(熊襲)である。厚鹿文は日本書紀景行天皇に記録が残る。景行天皇は4世紀の天皇である。熊鹿文から厚鹿文まで300年ほどの時間が流れている。4世紀の熊氏はどのように生きていたのであろうか。

景行天皇十二年の秋七月に、熊襲反きて朝貢らず。

十二月の五日に、熊襲を討たむことを議る。是に、天皇、群卿に詔して曰はく、「朕聞く、襲國に厚鹿文・迕鹿文といふ者有り。是の兩人は熊襲の渠師者なり。衆類甚多なり。是を熊襲の八十梟師と謂ふ。其の鋒當るべからず。師を興すこと少くは、賊を滅すに堪へじ。多に兵を動かさば、是百姓の害なり。何か鋒刃の威を假らずして、坐づからに其の國を平けむ。」とのたまふ。時に一の臣有り。進みて曰はく、「熊襲梟帥、二の女あり。兄を市乾鹿文と曰す。弟を市鹿文と曰す。容既に端正し。心且雄武し。重き幣を示せて麾下に擣納るべし。因りて其の消息を伺ひたまひて、不意の處を犯さば、會て刃を血さずして、賊必ず自づから敗れなむ。」よまうす。天皇詔はく、「可なり」とのたまふ。是に、幣を示せて其の二の女を欺きて、幕下に納る。天皇、則ち市乾鹿文を通して陽り寵みたまふ。時に市乾鹿文、天皇に奏して曰さく、「熊襲の服はざることをな愁へたまひそ。妾良き謀有り。即ち一二の兵を己に従へしめたまふべし。」とまうす。而して家に返りて、多に酔き酒を設けて、己が父に飲ましむ。乃ち酔ひて寐ぬ。市乾鹿文、密に父の弦を断つ。爰に従へる兵一人、進みて熊襲梟帥を殺しつ。天皇、則ち其の不孝の甚きことを惡みて、市乾鹿文を誅す。仍りて弟市鹿文を以て、火國造に賜ふ。(日本書紀景行天皇)

熊襲の王厚鹿文の生々しい記録である。景行紀においては熊氏は熊襲と書かれている。熊氏の王厚鹿文と九州天皇家の関係は「熊襲反きて朝貢らず」に表れている。九州天皇家の方が格が上だった。この上下関係は姫氏と熊氏の関係に遡るであろう。九州天皇家は「阿米」を祖とする姫氏である。熊氏は姫氏に遅れること200年の渡日である。すでに九州を支配していた姫氏が熊氏の上に立ったのは当然である。姫氏である九州天皇家が熊襲に対して朝貢を求めているのもまた当然であろう。しかし熊襲は強力な国家であった。正面からの武力制圧はとるべきではない。先ず婚姻関係を結びその上で作戦を練ろうと考えたのである。ここにおいても格上の九州天皇家と格下の熊氏の婚姻関係が表れている。

- (6) この厚鹿文の「熊襲國」はどこに存在したのであろうか。4世紀には吉野ヶ里はすでに衰退している。では佐賀市の「伊都國」に「厚」はいたのであろうか。九州天皇家景行が居た都は行橋市、或いは小倉南区である。『日本書紀』は「弟市鹿文を以て、火國造に賜ふ。」と書く。「火國」とはどこか。後世、「肥前・肥後」と呼ばれた熊本県であろう。「火の国」は「阿蘇山の国」である。「火國の造」としたというのであるから、厚鹿文は熊本市に住んでいたと思われる。卑弥呼を王に迎えた倭国の王の末裔が厚鹿文だったのであろう。景行の都があった行橋市から熊本市は遠い。景行の息子「小碓命」が熊曾国に旅だつて到着まで数ヶ月要したと日本書紀は伝える。

是に天皇(景行)、其の御子の建く荒き情を惶みて詔りたまひしく、「西の方に熊曾建二人有り。是れ伏はず禮无(な)き人等なり。故、其の人等を取れ。」とのりたまひて遣はしき。此之時に當り、其の御髪を額に結いたまひき。爾に小碓命、給其の姨倭比賣命の御衣御裳を給はり、劔を御懷に納れて幸行でましき。

(7) 博多の弥生遺跡は「熊氏」の遺跡

博多周辺には多くの弥生遺跡が発見されている。これらは九州天皇家のものではない。九州天皇家は彦島、小倉北区、小倉南区、荻田町、行橋市、香春町、田川市を統治していた。景行紀は「西の方に熊曾二人有り」と伝える。古代天皇家の國の西は博多である。博多周辺の弥生遺跡は熊氏のものであろう。

唐原遺跡(唐原)・吉武高木遺跡(吉武)・拾六町ツイジ遺跡(拾六町)・拾六町平田遺跡(拾六町平田)・今山遺跡(横浜)・下山門敷町遺跡(下山門)・石丸古川遺跡(石丸)・福重稲木遺跡(福重)・湯納遺跡(大字拾六町)・橋本一丁目メ遺跡(橋本)・牟多田遺跡(野方字牟多田)・姪浜遺跡(姪浜)・今山石斧製造所跡(横浜)・今宿五郎江遺跡(今宿)・野方遺跡(野方)・野多目遺跡群グン(野多目)・大橋E遺跡(大橋)・和田B遺跡(和田)・横手遺跡(横手)・日佐遺跡(日佐)・寺島遺跡(横手南町)・笠拔遺跡(横手南町)・弥永遺跡(弥永)・警弥郷A遺跡(警弥郷)・警弥郷B遺跡(警弥郷)・弥永原遺跡(日佐)・五十川遺跡(五十川)・雑餉隈遺跡(雑餉隈)・麦野A遺跡(麦野)・諸岡遺跡(諸岡)・比恵遺跡(博多駅南)・春住遺跡(春住)・下月隈C遺跡(下月隈)・天神森遺跡(下月隈)・吉塚遺跡(吉塚)・吉塚祝町遺跡(吉塚)・那珂君休遺跡(那珂)・宝満尾遺跡(下月隈)・赤穂ノ浦遺跡(下月隈)・博多遺跡群グン(博多駅前)・高畑遺跡(板付)・金隈遺跡(金隈字観音浦)・アサヒビール工場遺跡(竹下)・井相田C遺跡(井相田)・原遺跡群グン(原)・藤崎遺跡(百道)・田村遺跡(田村)・有田遺跡・有田七田前遺跡(有田・小田部)・免遺跡群グン(賀茂)・原東遺跡(飯倉)・野芥遺跡(野芥)・野芥大藪遺跡(賀茂)・次郎丸遺跡(次郎丸)・東ヒガシ入部遺跡(東入部)・柏田遺跡(上白水柏田)・門田遺跡(上白水門カド田)・大荒遺跡(大和町)・須玖岡本遺跡(岡本)・須玖坂本B遺跡(岡本)・須玖タカウタ遺跡(須玖北)・須玖五反田遺跡(須玖北)・赤井手遺跡(弥生)・野藤遺跡(須玖北)・御供田遺跡(春日公園)・春日平田西遺跡(春日)・平若A遺跡(弥生)・須玖永田遺跡(日の出町)・辻田遺跡(上白水辻畑)・下大荒遺跡(日の出町)・川久保遺跡(下白水北)・上平田遺跡(大和町)・天田遺跡(大和町)

## 卑弥呼

三世紀、魏に朝貢していた国が女王卑弥呼の倭国である。

和光中(178~183) 倭國乱(三国志)

魏 景初2(238)6月、倭の女王、大夫難升米を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。太守劉夏、吏を遣わし、將って送りて京都に詣らしむ。

魏 正始元年(243)、太守弓遵、建中尉梯儻等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭國に詣り、倭王に拝仮し、ならびに詔を齎し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。正始4(243) 倭王、また使大夫伊聲耆・掖邪拘等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・綿衣・帛布・丹・木拊・短弓矢を上献す。掖邪拘等、率善中郎將の印綬を尅拝す。

魏 正始8(247) 倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭戴烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。

魏 正始9(248) 卑弥呼以て死す。大いに塚を作る。更に男王を立てしむ、国中服せず。

魏 嘉平1(249) また卑弥呼の宋女壻与年十三なるを立てて王となし、国中遂に定まる。壻与、倭の大夫率善中郎將掖邪拘等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。

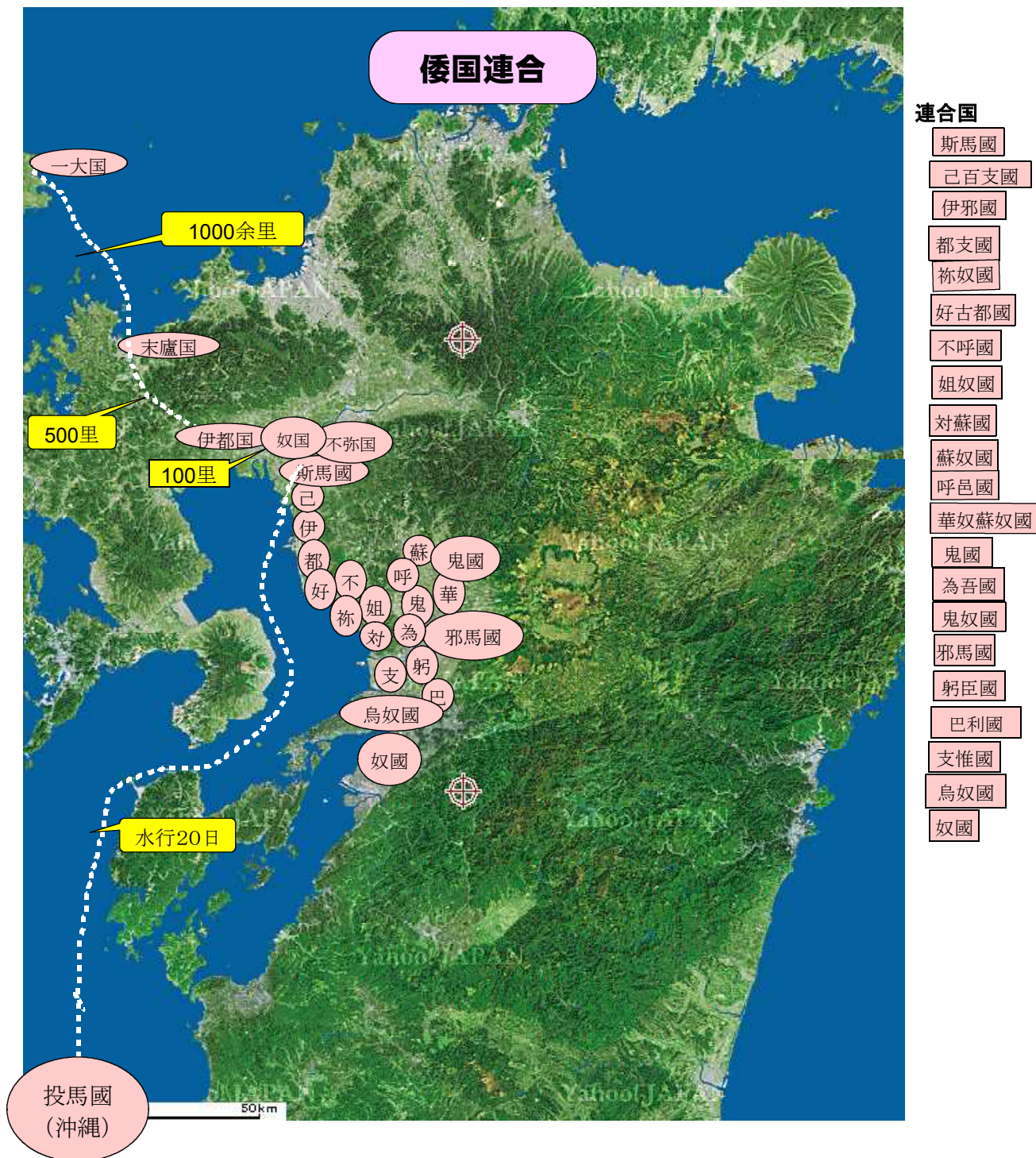
晋 泰始1(265) 魏亡び晋武帝即位

晋 泰始2(266) 倭女王遣使朝貢

この女王については「松野連姫氏系図」は記していない。なぜなら卑弥呼は姫氏系図の王ではなかった

からである。卑弥呼の倭国は「邪摩惟」と名乗った。この国名が表しているように、『魏志倭人伝』が伝えた卑弥呼の國は単独の國家ではなく、都が存在した「邪馬国(熊本市)」を中心とする21国の連合国家であった。卑弥呼はこれらの小国の王によって連邦の盟主に選ばれたが、卑弥呼自身は「姫氏系図」の王だったのではない。故に「姫氏系図」に登場しないのである。

## 卑弥呼の國は連邦国家



卑弥呼の國家形態は正しく認識されなければならない。『後漢書』の「邪馬台」、『魏志倭人伝』紹興本の「邪馬台」は中国側の呼称で、倭国自身が名乗った国名ではない。倭人の自称は、676年に李賢が『後漢書』の割注に書いた「邪摩惟」が唯一の史料である。この国名に「國」をつけていないのは、21国の連邦だったからである。かつての「ソビエト連邦」と同じように、21の連邦を「邪摩惟」といったのである。「邪摩惟」は中国史書の漢字表記であるが、本来の倭語(日本語)に直すと、「邪摩結」となる。



「結(ゆい)」とは連邦を意味する。「邪摩」は倭語(日本語)に直すと「山」となろう。21国の1つ「邪馬国」とは熊本市である。その国名の由来となった「山」とは阿蘇山を象徴したものであろう。

倭国は熊本市を首都とした連邦国家だった。『魏志倭人伝』はそれらの国名を全て正確に書いている。

次に斯馬國あり、次に己百支國あり、次に伊邪國あり、次に都支國あり、次に弥奴國あり、次に好古都國あり、次に不呼國あり、次に姐奴國あり、次に対蘇國あり、次に蘇奴國あり、次に呼邑國あり、次に華奴蘇奴國あり、次に鬼國あり、次に為吾國あり、次に鬼奴國あり、次に邪馬國あり、次に躬臣國あり、次に巴利國あり、次に支惟國あり、次に鳥奴國あり、次に奴國あり。これ女王の境界の尽くる所なり。その南に狗奴國あり。男子を王となす。その官に狗古智卑狗あり。女王に属せず。郡より女王國に至る万二千余里。

これらの国は日本各地に分散していたのではない。これらの国々は「不弥国(筑後市)」から南に隣接して存在していた。それ故に、「次に…次に…次に…」と書いているのである。

全ての国の正確な所在地は不明である。だがいくつかは想定できる。「斯馬(しま)國」はみやま市、「鬼國」は菊池市、「鳥奴國」は宇土市、「奴國」は八代市である。女王の連合国家の南には男王卑弥弓呼が統治する「狗奴國」があった。「狗奴國」とは鹿児島市となろう。卑弥呼はこの國の王卑弥弓呼と仲が悪く、紛争が絶えなかった。卑弥呼が魏に朝貢した理由の一つがそれである。魏の皇帝は、調停のため「張政」を派遣した、と伝えている。

## 卑弥呼と壹与は「天一族」

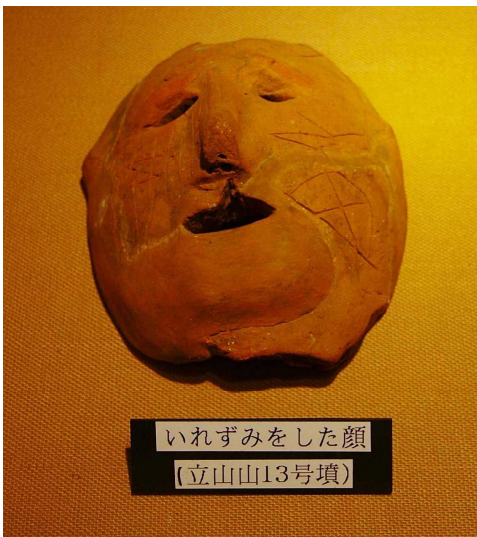
卑弥呼の次に倭国連邦の大王に選ばれたのが「壹与」である。倭人伝は「壹与は卑弥呼の宗女」と書いている。卑弥呼と「壹与」は同族であった。「壹与」は別の中国史書では「台与」とも書かれている。誤記ではなく、彼女は二つの名前を持っていた。「国産神話」に「伊豫二名嶋」が登場する。この島の女王は「二名」を持っていた。「伊豫と豊」である。よって「二名島」と呼ばれた。この「二名島」は実在する。下関市彦島老町である。『倭人伝』「壹与」もこの島の出身である。

壹与と卑弥呼は同族であると云う。すると、卑弥呼も彦島出身ということになる。卑弥呼も壹与も彦島の出身で、「阿米」一族ということになる。

「阿米」は松野連姫氏系図に表れる第九代の王である。卑弥呼は「阿米」一族の天照大神の縁につながる者といえる。卑弥呼は本来は「日のみこ」であろう。「みこ」は神武天皇家では「皇子」として継承されている。卑弥呼が熊本市を首都とした倭国連邦の女王に迎えられたのは、倭国と彦島の天一族が同じ姫氏「阿米」をルーツとしたからであろう。

九州神武天皇家の祖は「阿米」である。卑弥呼の国は姫氏と熊氏の連合である。神武天皇家と卑弥呼の倭国は姫氏という同じ血縁で結ばれていたのである。

## 鯨面



いれずみをした顔  
(立山山13号墳)

岩戸山歴史資料館蔵

『魏志倭人伝』に倭人の特徴を記した次の記事がある。

男子は大小と無く、皆鯨面文身す。古より以来、その使中國に詣るや、皆自ら大夫と称す。夏后小康の子、会稽に封ぜられ、断髪文身、以て蛟龍の害を避く。今、倭の水人、好んで沈没して魚蛤を補う。文身は亦以て大魚・水禽を厭う。後やや以て飾りとなす。諸国の文身各々異り、あるいは左にしあるいは右にし、あるいは大にあるいは小に、尊卑差あり。その道里を計るに、当に会稽の東治の東にあるべし。

倭國の男は大人も子どもも顔や体に入れ墨をしていたと云う。八女市岩戸山歴史資料館には顔に入れ墨をした男の顔の埴輪が展示されている。

## 伊須氣余理比賣の歌の「姫氏の王」

黥面（顔の入れ墨）と云えば、神武が彦島で徴兵した久米一族も黥面していた。その事を示す歌がある。神武が皇后に伊須氣余理比賣を迎えようとする場面である。使者となった大久米命が伊須氣余理比賣に神武の思いを伝える。伊須氣余理比賣は歌で答える。歌は難解である。『古事記』では次のように訓まれているが、この訓みでは歌の意は明快であるとはいえない。

爾に大久米命、天皇の命を以ちて、其の伊須氣余理比賣に詔りし時、其の大久米命の黥ける利目を見て奇しと思ひて歌曰ひけらく、

阿米都都(あめつつ) 知杼理麻斯登登(ちどりましと) 那杼佐禰流斗米(などさけるとめ)  
とうたいき。爾に大久米命、答へて歌曰ひけらく、

袁登賣爾(おとめに) 多陀爾阿波牟登(ただにあはむと) 和加佐禰流斗米(わがさけるとめ)  
故、其の孃子、「仕へ奉らむ」と白しき。是に其の伊須氣余理比賣命の家、狹井河の上に在りき。

歌は難解であるが、それは解説の手がかりがなかったからである。「阿米都都」「麻斯登登」が古来難解とされる。文学大系「古事記」の頭注によると、これらは「鳥の名前」とであると解釈されている。「阿米」は鳥、「都都」も鳥、「知杼理」も鳥、「麻斯登登」も鳥と読まれている。確かに「知杼理」は千鳥であるが、彼女は神武の求愛に四羽の「鳥」の名前を羅列して応えたのであろうか。そんな人を莫迦にしたような返答はないであろう。彼女が「知杼理(千鳥)」と詠ったのは眼の周りの入れ墨の故である。だが、「阿米」は鳥ではない。彼女が詠った「阿米」とは人名である。しかも、王の名前である。「阿米」は姫氏系図第九代の王の名前である。伊邪那岐の時代より遙か昔、彦島に「高天原」を造った九州天皇家の始原の王「阿米」である。『古事記』の伊須氣余理比賣の歌は姫氏系図の「阿米」という王の名前をそのまま残していたのである。この手がかりを得たことによって歌は解説可能となった。神武の皇后となる伊須氣余理比賣はこの王の名前を知っていた。そして神武の武将に「阿米都都」と呼びかけたのである。

### (1) 阿米都都

「阿米」は「アマイ」である。「阿米」は姫氏系図の第九代の王「阿米」である。『古事記』は伊須氣余理比賣の歌の「阿米」をそのままの文字で記録している。驚くべき事であろう。伊須氣余理比賣は王「阿米」を知っていた。それだけではない。神武が始祖「阿米」の子孫であるという事も知っていた。更に、神武が「天(あま=彦島)」から出征してきたことも知っていたのである。

都都は通常「つつ」と訓まれている。だが、『倭人伝』「伊都國」は「イトコク」と読む。「都」は「ト」と訓まれる。「都都」は「トト」と訓むべきであろう。

「阿米都都」は「アマイトト」と訓む。「阿米」は「天(あま)」と詠ったから、「阿米都都」は「天のトト」と訓んでもよいであろう。

### (2) 知杼理麻斯登登

「知杼理」は千鳥である。問題ない。「麻斯」は「マシ」である。「登登」は「トト」である。訓みは「チドリマシトト」である。「麻」の訓みは「マ」である。現代漢字を使えば「麻」は「目」である。目は「マ」である。従って「知杼理麻」は「千鳥目」となる。「千鳥目」とは目の周りの入れ墨をいう。神武の兵は入れ墨をしていた。千鳥が詠われたのはこの入れ墨を云うためである。

「斯(シ)」は「為(ス)」の活用形である。「知杼理麻斯登登」の訓みは「千鳥目をしたトト」である。伊須氣余理比賣命は「トト」を繰り返して歌っている。

「都都」と「登登」はどちらも「トト」である。たとえ意味が不明であろうと、この二つは同じく「トト」と読まなければならない。意味の考察は後の課題である。



<http://image.search.yahoo.co.jp/search?p=>

(3) 那杼佐禰流斗米

「佐禰流」は「サケル」で「割ける」である。「斗米」は訓みは「トマ」である。「米」は「マ」である。「米(マ)」も「目」である。「トマ」は「利目」である。「那杼」は「ナド」である。「ナド」は「何故」「なんぞ」である。「那杼・佐禰流・斗米」は、「など割ける利目」である。

(4) 阿米都都(あまいとと) 知杼理麻斯登登(ちどりましとと) 那杼佐禰流斗米(などさけるとま)

歌の訓みは単純である。「阿米(天)のトト、千鳥目したトト、など割ける利目」である。

伊須氣余理比賣命は神武と大久米命が彦島の「阿米(天)一族」であることを知っていた。だから大久米命を「阿米(天)のとと」と呼んだのである。彼女の歌に「阿米」という表記が使われていることを考えると、神武の時代には「天」は「阿米」という王の名前であるということは広く知られていた事実だったのであろう。「阿米」が打ち立てた国が「天(高天原)」であると認識されていた。「天一族」とは「阿米一族」だった。伊須氣余理比賣命はその事実を知っていたのである。

(5) 「都都」「登登」は男

では「都都」、或いは「登登」と表記された言葉「トト」はどんな意味を持つのであろうか。これは文脈からいえば名詞である。現代日本語において最も近いのは「父」ではないだろうか。父親は「とと」「てて」「ちち」などと云われる。歌の「都都(登登)」は父の意である「とと」に近いのではないか。「とと」がなぜ父親をいうのか語源的には不詳である。「とと」は弥生語(姫氏の母国、呉の言葉)以前にさかのぼるかもしれない。むろん伊須氣余理比賣命は「父親よ」と呼びかけたのではない。男の人の意味で「とと」を使ったのであろう。「男」は接頭語の「を」を取れば「トコ」となり、「夫」も接頭語の「を」を取れば「ト」となる。

伊須氣余理比賣命の名前は「富登多多良伊須須岐比賣命」である。名前の「富登(ほと)」とは女陰の意である。だから彼女には別の名があった。比賣多々良伊須氣余理比賣命である。古事記は割注に「富登という名をよく思わず比賣に変えた」と書いている。若い乙女の名前に「富登」とはいくら何でも恥ずかしかったのであろう。「登登(トト)」と「富登(ホト)」は男女を表す対の言葉と思われる。

“ 阿米(天)の男の人よ、千鳥目をした男の人よ、何故、割ける利目なの ”

このように彼女は尋ねたのである。大久米命は慌てたと思われる。いつの時代も年頃の女性の考えることは男には分からないものである。大久米命は彼女が神武の想いにどう応えるか、彼女は神武の求婚を受け入れるかどうか、聞き漏らすまいとしていたのに、彼女は突如、彼の鯨面を問うてきたからである。まさか「これは我が国の風習でございます」と興ざめた返事をする訳にもいかなかったであろう。しかし彼は賢明であった。彼は即座に「美しいあなたをよく見たいからですよ。」と機転を利かせて女性の喜びそうな答えをした。この答えに参って、彼女は神武の思いを受け入れることとなる。

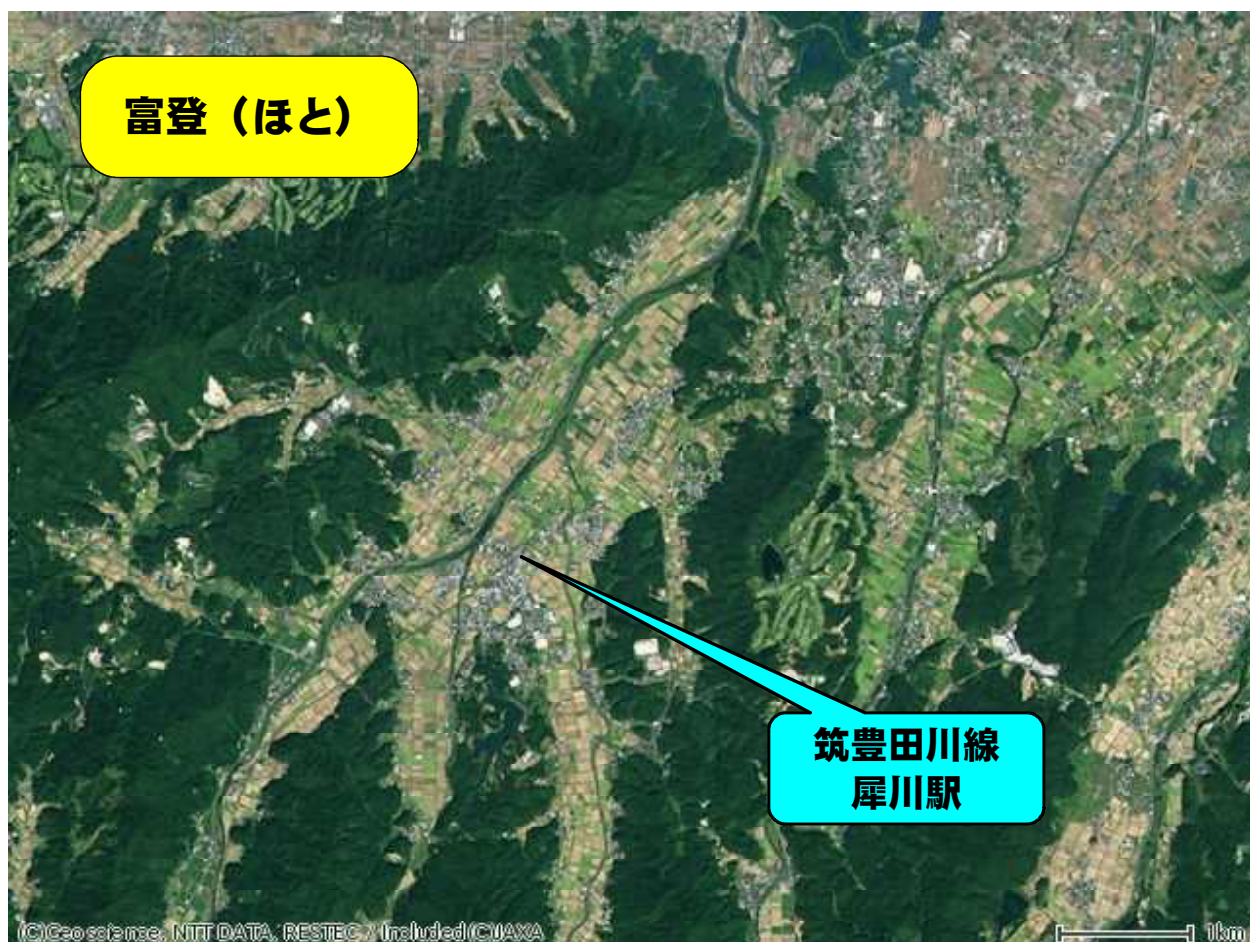
伊須氣余理比賣命の家は「狭井河」の畔にあった。「狭井」とは百合の花である。神武と伊須氣余理比賣は百合の花に囲まれた新居で新婚の一夜を過ごした。なお、この美しい名前の「狭井河」とは行橋市の犀川、現在の今川である。

## 富登(ほと)

ところで、伊須須岐比賣命には何故「富登(ほと)」という名前がついているのであろうか。その理由は「富登」が彼女の在所の地名だったからである。たとえば神武の最初の妻は「阿多の小椅君の妹」である。この「阿多」とは彦島瀬戸を表す直角の意を持つ地名である。同じように伊須須岐比賣命は「富登」という土地の娘だったので名前に「富登」がついていたのである。女陰を表す「富登」が名前についているからといってこの名前が特別だったのではない。その在所の地名を名前にかぶせるのが普通だったのである。ではなぜ、彼女の住んでいた土地は「富登(ほと)」という“愉快”な地名だったのか。通常地名は支配者の名前か、地形によることが多い。まさか、「富登」という名前の王はいなかったと思えるから、「富登」は地形に由来する地名であろう。

彼女が住んでいたのは犀川ある。その場所は現在の平成筑豊田川線の「犀川駅」付近であろう。この地は盆地である。盆地の中央を縦に犀川(今川)が流れている。

その地形を航空写真で見てみよう。さてさて、あなたにはこの地形はどう見えますか。これはまさしく「富登」ではないか。昭和四十年頃まで民家の塀や路上によく見られた子どもの女陰の落書きである。



## 鯨面は姫氏の伝統

大久米命は目の回りに入れ墨をしていた。神武の兵の久米一族は彦島の海部であった。彼らは「高天原」を作った始原の神「阿米」の末裔であった。そして卑弥呼の國の人々も鯨面であった。彼らもまた姫氏一族であった。彦島の久米一族も卑弥呼の國の人々も同じルーツをもつ姫氏一族であった。故に同じ伝統を持った。それが鯨面であった。姫氏と入れ墨の縁は遠くに遡る。

周の古公亶父(ここうたんぽ)の末子・季歴は英明と評判が高く、この子に後を継がせると周は隆盛するだろうと予言されていた。長子・太伯(泰伯)と次子・虞仲(仲雍)は末弟の季歴に後継を譲り、呉の地にまで流れて行き、現地の有力者の推挙でその首長に推戴されたという。後に季歴は兄の太白・虞仲ら呼び戻そうとしたが、太伯と虞仲はそれを拒み全身に刺青を施した。当時刺青は蛮族の証であり、それを自ら行ったということは文明地帯に戻るつもりがないと示す意味があったという。太伯と虞仲は自らの国を立て、国号を句呉(後に寿夢が呉と改称)と称し、その後、太伯が亡くなり、子がなかったために首長の座は虞仲が後を継いだという。 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)

「句呉」の始祖太伯は全身に入れ墨をしたという。姫氏は呉の出身の王族である。彼らが入れ墨をしていたのは太伯の遺志を継いでいたからである。

## 厚鹿文

四世紀初頭、景行の時代に熊氏の國と九州天皇家は再び相まみえる。この時の倭國王は姫氏系図の「厚鹿文」である。この王の名も「厚」一字で「鹿文」は「あざな」であろう。日本書紀がこの王について記録

している。

十二月の癸巳朔丁酉(5日)に、熊襲を討たむことを議る。是に、天皇、群卿に詔して曰はく、「朕聞く、襲國に厚鹿文・迺鹿文といふ者あり。是の兩人は熊襲の渠帥者なり。衆類甚多なり。是を熊襲の八十梟帥と謂ふ。其の鋒當るべからず。師を興しこと少くは、滅賊を滅すに堪へじ。多に兵を動さば、是百姓の害なり。何か鋒刃の威を假らずして、坐づからの其國を平けむ。」とのたまふ。

時に一の臣あり。進みて曰さく、「熊襲梟帥、二の女(むすめ)有り。兄を市乾鹿文と曰す。弟を市鹿文と曰す。容既に端正し。心且雄武し。重き幣を示して以磨下に搦納るべし。因りて其の消息を伺ひたまひて、不意の處を犯さば、會て刃を血さずして、賊必ず自づから敗れなむ。」とまうす。天皇詔はく、「可也」とのたまふ。是に、幣を示せて其の二の女を欺きて、幕下に納る。天皇、則ち市乾鹿文を通して陽り寵みたまふ。

時に市乾鹿文、天皇に奏して曰さく、熊襲の服はざることを愁へたまひそ。妾良き謀有り。即ち一二の兵を己に従へしめたまふべし。」とまうす。而して家に返りて、多に酔き酒を設けて、己が父に飲ましむ。乃ち酔ひて寐ぬ。市乾鹿文、密に父の弦を断つ。爰に従る兵一人、進みて熊襲梟帥を殺しつ。天皇、則ち其の不孝甚しきことを惡みたまひて市乾鹿文を誅す。仍りて弟市鹿文を以て火國造に賜ふ。

(日本書紀景行天皇)

神武を初め景行、倭健等、九州天皇家の天皇が戦った古代国家は熊襲であった。熊襲とは「楚」を出自とする熊氏一族の國である。熊氏は、神武、景行の祖である「阿米」一族とは出自が異なる。景行が暗殺した王は「熊襲」の王であった。景行が暗殺した「厚鹿文」は「阿米」の一統ではなく、熊氏の一統だったのである。日本書紀は「厚」の娘二人の名前を「兄を市乾鹿文と曰す。弟を市鹿文と曰す。」と正確に記録している。松野連姫氏系図もこの二人の娘の名前を書いている。姫氏系図では「厚鹿文」の次の王は「宇也鹿」となっている。「厚鹿文」「迺鹿文」の二人が暗殺され再び「宇閉」の系統が王位に就いたということであろう。日本書紀の記述と系図は筋が通っている。

吉野ヶ里の王たちはそれぞれに九州全土に遠征してそれぞれに國を開いていた。景行、倭健の時代にはそれらの國は独立して歩んでいた。「阿米」を祖とする九州天皇家もその一つである。「熊」を祖とする「クマソ」もその一つである。卑弥呼を迎えた熊本市の連邦国家もその一つである。卑弥呼と絶えず紛争を繰り返していた「狗奴國」もその一つである。姫氏の國、熊氏の國といっても一つに統一されていたのではない。それぞれが独立国家として歩み、お互いに勢力を張っていたのである。

## 縣は熊氏の行政区名

日本書紀は暗殺に成功した景行が九州西部を巡幸したと記録している。日本書紀景行紀に「縣」という行政区名が登場する。「縣」は熊氏の行政区名であった。熊氏の國においては「縣」という行政組織が確立していた。しかし、姫氏である九州天皇家は行政区名として「郡」を使用していた。記紀には「縣」が度々登場するが、その理由は九州天皇家が熊氏の行政区が敷かれていた領国に侵入していったからである。九州のほとんどは熊氏の王の支配下にあった。故に九州全域に「・・・縣」という行政区が存在したのである。景行紀に八女の記事がある。ここにも縣が登場する。「八女縣」「水沼縣」である。景行の時代にも八女に女王國が存続在していた。その王は八女津媛という名前であった。

景行十八年七月七日に、八女縣に到る。則ち智藤山を越えて、南粟岬を望りたまふ。詔して曰はく、「其の山の峯岫重疊りて、且美麗しきこと甚なり。若し、神、其の山に有しますか」とのたまふ。時に水沼縣主猿大海、奏して言さく、「女神有します。名は八女津媛と曰す。常に山の中に居します」とまうす。故、八女國の名は此に由りて起れり。

(日本書紀景行天皇)

## 倭の五王 讚一珍一濟一興一武

五世紀、中国史書に「倭の五王」が登場する。讚一珍一濟一興一武である。これらの王は姫氏(熊氏)の五代に渡る王である。

倭の五王の一人「武」は南朝劉宋の天子に上表文をおくり、「使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・

慕韓六國諸軍事安東大將軍・倭王」に除せられている。倭王「武」は九州の「倭國」と朝鮮半島の五ヶ国、併せて六ヶ國の都督に任命されていた。

「武」が書いた上表文には彼の祖先の征服譚が述べられている。

封國偏遠 作藩于外 自昔祖禰 躬[\*環]甲冑 跋涉山川 不遑寧處 東征毛人 五十五國 西服衆夷六十六國 渡平海北 九十五國 王道融泰 廓土遐畿 累葉朝宗 不愆于歲 臣雖下愚 忝胤先緒 驅率所統 歸崇天極 逍遙百濟 裝治船舫 而句驪無道 圖欲見吞 掠抄邊隸 虔劉不已 每致稽滯以失良風 雖曰進路 或通或不 臣亡考濟 實忿寇讎 壅塞天路 控弦百萬 義聲感激 方欲大舉 奄喪父兄 使垂成之功 不獲一簣 居在諒闇 不動兵甲 是以偃息未捷 至今欲練甲治兵 申父兄之志 義士虎賁 文武效功 白刃交前 亦所不顧 若以帝德覆載 摧此疆敵 克靖方難 無替前功 竊自假開府義同三司 其餘咸假授 以勸忠節

わが封國は中国から遠く偏り。藩(まがき)を作り外を干(まも)る。昔より祖先、甲冑を身につけ、山川を跋涉す。いとまず處を寧んず。東に毛人を征す、五十五国。西に衆夷を服す、六十六国。海北に渡り平定する、九十五国。王道は融泰す。

彼らの祖先は東の毛人の國五十五國、西の衆夷の國六十六國、朝鮮半島の九十五國を征服したと云う。歴代は九州各地を転戦し支配下に治めた。また玄界灘を渡り朝鮮半島まで遠征した。

倭王武は上表文で自らを「開府義同三司」と名乗っている。彼が開いた「府」が太宰府である。また彼は「使持節都督」でもあった。故に太宰府が都督府とも伝えられているのである。



## 「噫(あい)」は現代日本語の「はい」

彼らの建国は先在した国家と戦い勝利した結果である。その国家とは縄文国家であろう。『魏志倭人伝』に次の記述がある。

下戸、大人と道路に相逢えば、逡巡して草に入り、辞を伝え事を説くには、あるいは蹲りあるいは跪き、両手は地に抛り、これが恭啓を為す。対応の声を噫という、比するに然諾の如し。

倭國には、「下戸」と「大人」の二つの階層が存在したと云う。この「下戸」とは縄文人であろうか。何故なら、対応の声が「噫(あい)」と云ったという。

「比するに噫とは然諾の如し」と『倭人伝』は説明を入れている。「然」とは「しかり、その通り」、「諾」とは承諾で、「答える、はいと答える」の意である。倭國の下戸が使った「噫(あい)」は中国語と比べてみると「然諾」と同じ意味だと書いている。これは、三世紀の古代日本語に関する貴重な記録である。古代中国から移住してきた弥生人である「姫氏」は日常言語は古代中国語(呉語)だった。彼らが征服した九州の古代国家は縄文文明を持つ国家だった。その國の人々、「下戸」は縄文語、つまり、原日本語を使用していた。その言葉の一つに「噫(あい)」があった。

「噫(あい)」は中国語で云えば、「然諾と同じだ」と解説している。「噫(あい)」は、現代日本語で云えば、「はい。わかりました。」に相当する。「はい、わかりました」という意を持つ原日本語「噫(あい)」を「下戸」は使っていたのである。なお、「大人」は、現在は、成人の意味で使われている。しかし、本来は身分を表わす「大人」であった。この本来の意味を残して使われているのが、魏志倭人伝で「投馬國」と表記された沖繩である。

戦後沖繩ヤクザの元祖は、ターリーこと喜舎場朝信(きしゃばちようしん)という男である。ターリーは漢字をあてはめれば「大人」となり、目下の者が親方や一家の長などを呼ぶとき、沖繩で昔から使われてきた中国風の尊称である。(「沖繩 だれにも書かれなくなかった戦後史」 佐野眞一・集英社)

「大人」は中国語では「ターレン」である。「ターリー」はこの変化であろう。「大人」という「倭國」での尊称は『魏志倭人伝』の「投馬國(沖繩)」で古代の意味を持ったまま現代まで受け継がれてきたと言えよう。

## 磐井君

六世紀初頭、記録に残る倭國の王は「磐井君」である。この王の古墳が八女市の「岩戸山古墳」と云われる。古事記においては筑紫の君・磐井と記されているが、実は倭國の王、磐井であった。

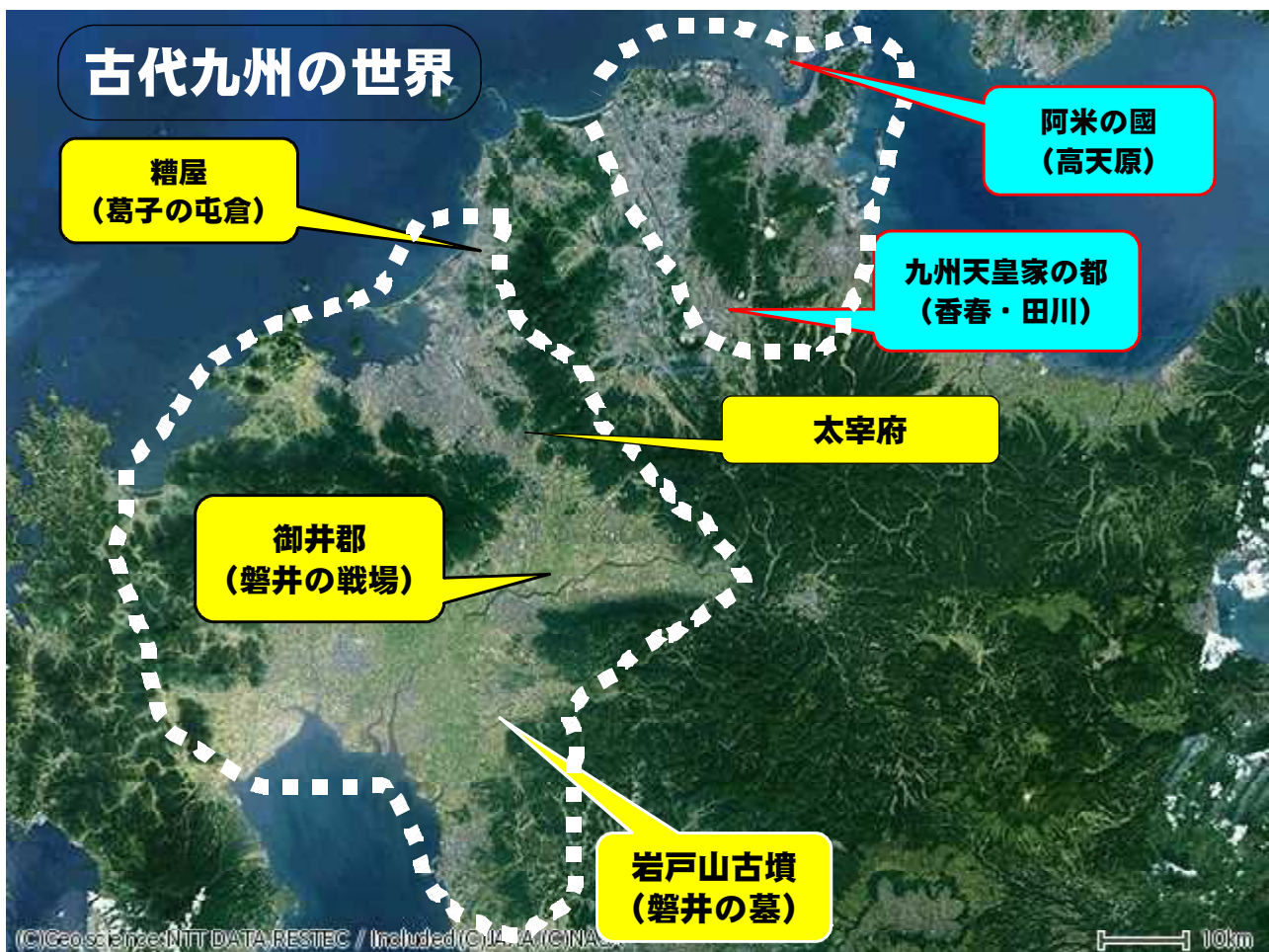


西暦527年、筑後川上流、福岡県三井において、倭国と「継体」の間で古代最大の戦があった。『古事記』は継体天皇の代に戦いがあったとしか伝えていない。良く知らなかったからである。

倭國王磐井と戦った国家は九州天皇家ではない。関西に実在した日本國天皇家である。「萬死つる地を避らず」と日本書紀が「芸文類聚」を引用して文飾している、が徹底戦であったと思われる。

(継体)廿二年の冬十一月の甲寅朔甲子(11日)、大將軍物部大連麁鹿火、親ら賊の帥、磐井と、筑紫の御井郡に交戦ふ。旗鼓相望み、埃塵相接げり。機を兩つの陣の間に決めて、萬死つる地を避らず。遂に磐井を斬りて、果して疆場を定む。十二月に、筑紫君葛子、父のつみによりて誅せられむことを恐りて、糟屋屯倉を獻りて、死罪を贖はむことを求す。

古代最大の激戦だったことを伝えている。この戦いはそれまでの九州天皇家と熊氏一族との戦いと様相を異にする。景行にしろ、倭健にしろ、熊襲の王を暗殺したが、國を滅ぼしたのではない。九州天皇家と熊氏の國との間で生じた紛争に過ぎない。従って、熊氏の國は存続してきた。しかし、527年の戦いは國家の存亡をかけた戦いであった。戦った國家は九州に於ける最大の倭國と、当時、日本列島の支配國家であった日本國天皇家である。日本國天皇家も最大の兵力を動員し、倭國の側も筑後平野の兵を総動員した戦いだったと思われる。



戦いは日本國天皇家の勝利に終わる。倭國の王、磐井は「山に隠れ、ひっそりと死んでいった」と風土記は伝える。その後、息子の「葛(カツ)子」が「父のつみによりて誅せられむことを恐りて、糟屋屯倉を獻りて、死罪を贖はむことを求す。」と書いている。「糟屋」とは福岡県古賀市である。『日本書紀』は古賀市は「磐井」の支配地域であったと記録しているのである。古賀市は元は「姫氏系図」第六代の王「玖賀」が建国した國だったと思われる。「磐井」はその土地を支配下に置いていた。王「磐井」の敗死によって、九州西部の倭國は衰退する。松野連姫氏系図によると、倭國の王・牛(慈)が欽明天皇の代に服降したと記す。



ここに倭国の一つ流れは幕を閉じ、もう一つの「阿米」の流れが九州の歴史を作っていくこととなる。「阿米」-「伊邪那岐命」-「天照大神」-「ニニギの尊」-「神武」-「天武」と続く九州天皇家である。天武の代に九州天皇家は日本國天皇家を倒した。壬申の乱である。天武は田川で即位して太宰府に入り全国を統治した。天武の皇后、持統は689年、太宰府から日本國天皇家の藤原京に遷都し、近畿天皇家を興した。持統が造営を手がけた平城京は元明の世に完成し、和銅3年、元明は平城京に遷った。ここに近畿天皇家の時代が始まることとなる。